

のとルネ 100 人女子会 2026

～能登で安心して産み、育てるために～

能登での子育て提言書

2026 年 3 月 14 日

のとルネ実行委員会

本提言書について

本書は、2026 年 3 月 14 日に開催された「のとルネホワイトデー100 人女子会 in 宝達志水」（参加者約 50 名）の議論と、事前アンケート（回答数 16 名）・当日のアンケートの結果をもとに作成しました。子育て世代のリアルな声を行政・議員・地域社会に届けるための提言書です。

能登地区の市議・町議 4 名、能登選出の国会議員 1 名も当日に参加し、生の声を受け止めていただきました。

はじめに — 能登の子育て、今が正念場

2024 年元日に発生した能登半島地震は、すでに深刻だった過疎化・少子化を一層加速させました。震災から 2 年以上が経過した今も、被災地では住環境の不安、医療・教育インフラの脆弱化、コミュニティの分断が続いており、子育て世代にとって「能登で産み、育てる」ことへのハードルはこれまで以上に高くなっています。

「のとルネ 100 人女子会」は 2018 年から毎年、能登の女性たちの声を形にしてきました。2026 年のテーマは「能登での子育て」。子育て世代を中心とした約 50 名が 3 時間にわたって語り合い、喜び・困難・希望を分かち合いました。

「話しながら涙で声を詰まらせる参加者もいました。それほどまでに、今の能登の子育て環境は厳しい。でも、だからこそ、皆さんの力を貸していただきたいのです。」

本提言書は、そのリアルな声と、全国的な子育て環境の課題データを照らし合わせながら、能登の子育てをどう守り、育てていくかを提言するものです。当日参加されなかった自治体の長、市議・町議の皆様、そして能登の未来を気にかけるすべての方々に、ぜひお読みいただきたいと思えます。

全国の子育て課題と能登の現実

まず、現代の子育て世代が全国共通で直面している課題を確認します。子育てから離れて久しい方々にも、今の子育ての実態をできるだけ身近に感じていただけたら嬉しいです。

課題	全国の状況	能登の状況
医療アクセス	小児科・産科の都市集中が進む	産科は七尾・金沢まで。北部には皆無
仕事・キャリア	育休後の復職率は向上も、地方では職自体が不足	キャリア断絶後の再就職先が極めて限られる
教育・習い事	首都圏との教育格差が問題視される	塾・クラブ・習い事の選択肢が都市部の数分の一
子育て孤立	核家族化で「孤独な育児」が深刻化	震災で友人・親戚との離別が加速し孤立が深まる
屋内遊び場	悪天候時の行き場不足は全国共通の課題	冬が長く、屋内で遊べる公共施設が圧倒的に不足
経済的負担	教育費・医療費の高騰が少子化の主因	収入も低く、支援制度の周知が不十分

※ 能登では、全国共通の課題に加え、震災の影響が複合的に重なっています。

事前アンケート結果 (回答数：16 名)

女子会開催前に、能登で子育て中・子育てに関わる方々にアンケートを実施しました。以下に主な結果を示します。

【Q2】能登での子育ての魅力・良いところ (複数選択)

順位	魅力・良いところ	主な回答数
1 位	豊かな自然環境	★★★★★★
2 位	伝統文化や祭りに触れ合える	★★★★★★
3 位	食べ物が新鮮で美味しい	★★★★★★
4 位	地域のつながり・見守りがある	★★★★
5 位	親戚や家族のサポートが得やすい	★★★★
6 位	待機児童が少なく、希望の園に入りやすい	★★★★

【Q3】震災後、最も不安に感じていること (単一選択)

順位	不安の内容	主な回答数
1 位	将来的な地域の衰退・人口減少	★★★★★★
2 位	医療機関 (小児科・夜間診療) の不足	★★★★
3 位	学校教育や習い事の選択肢の減少	★★
4 位	コミュニティの分断 (友達や親戚との離別)	★★

【Q4】 あれば子育てしやすくなる支援・施設（複数選択）

順位	必要な支援・施設	主な回答数
1 位	雨の日や冬でも遊べる「屋内遊び場」	★★★★★★★★★
2 位	教育費や医療費のさらなる助成	★★★★★★
3 位	親同士が交流できるカフェ・サロン	★★★★★★
4 位	一時預かりや病児保育の充実	★★★★
5 位	習い事や塾の選択肢（オンライン含む）	★★★★
6 位	移住者と地元住民が繋がる仕組み	★★★

【Q5】 能登で子育てを続ける上での一番のハードル（単一選択）

順位	ハードル	主な回答数
1 位	仕事（収入・キャリア）の確保	★★★★★★★★★
2 位	教育環境の充実度	★★★★
3 位	住まい（家賃・修繕・物件不足）の確保	★★★
4 位	医療体制への不安	★★
5 位	自家用車への依存（交通の便）	★

女子会当日の声 — データの向こうにある「生の現実」

数字の背後には、一人ひとりの切実な声があります。当日の話し合いから、特に印象的な発言をご紹介します。

◆ 産科・医療への深刻な不安

「一番近くて七尾、でもお腹が張ったり出血したりしたら、そこから金沢まで行かないとダメ。こんな状況で安心して子供を産めるの？」

「地域の病院の救急・休日対応が不安で、妊娠に踏み出せないかもしれない、という方もいた。本当になんとかしたい。」

能登北部には産科がなく、妊婦は七尾市や金沢市まで通院を余儀なくされています。緊急時の対応への不安は、子どもを産む・産まないという意思決定そのものに影響を与えています。これは単なる「不便」ではなく、「出産を諦める地域」を生み出しかねない、深刻な問題です。

◆ 子どもたちの未来と進学後の流出

「小学6年生に『20年後も地域に残りたいか』と聞いたら、10人中1人しかここと答えなかった。今の状態だと、本当に20年後はどうなるのか…。」

「高校の進学段階で出て行って、もう戻ってこないような状況になっている。」

地域への愛着が育まれていない、あるいは「戻る場所」「戻る理由」が見えないまま子どもたちが育っています。学校が「失敗できる安全な場」であってほしいという声も多く、チャレンジを許容しない空気が、地域外への流出を加速させています。

◆ 孤立する子育て、介護と育児の二重苦

「義理の両親と同居しているが、助けてもらうより助けないといけない場面が増えてきた。1歳未満と3人の子供を抱えながら、介護も視野に入れなければならない。」

「友達や支えてくれる人が震災で離れてしまった。誰にも相談できない日々が続いている。」

核家族化に加え、震災による人口流出で「頼れる人」が激減しています。育児と介護の同時進行、移住してきたものの地域に知り合いがいない孤立など、複合的な困難が重なっています。

◆ 仕事・キャリアの断絶

「一旦キャリアが途絶えてしまうと、戻る仕事が見えない。将来がどうなるか分からない。」

「不登校の子どもがいるが、町に支援がなく、元気になっても行ける場所がない。仕事も続けられなくなる。」

「働きたくても働けない」「子どものために仕事を辞めざるを得ない」という状況は、経済的な不安だけでなく、自己肯定感や孤立感にも繋がっています。子育て支援とキャリア支援、ぜひセットで考えていただくと助かります。

◆ 中高生の「居場所」がない

「部活が任意になった中学生が、放課後に行く場所がない。家にいるだけで、親としてどうしていいか分からない。」

「高校生が放課後に勉強できる場所がない。塾もない、図書館も遠い。学力格差がどんどん広がっていく気がして不安。」

「子育て」というと乳幼児・小学生を想像しがちですが、中高生を持つ親も深刻な悩みを抱えています。部活動が地域移行・任意化されたことで放課後の行き場を失った中学生、自習や受験勉強の場がなく学力格差を感じる高校生——。こうした 10 代の子どもたちの居場所不足は、若者の地域離れにもつながりかねません。子育て支援の対象を「18 歳まで」と広くとらえた取り組みをお願いしたいと思います。

参加者の声が教えてくれること

能登での子育てを「諦めた」友人・知人を何人も見送った、という声が複数ありました。今まさに能登で子育てしている方々は、さまざまな困難を抱えながらも踏みとどまっている、とても頑張り屋さんたちです。どうか、その方々の声に耳を傾け、一緒に考えていただけたらと思います。

課題の構造分析 — なぜ能登の子育てが厳しいのか

当日の議論と会議録の分析から、能登の子育て課題は以下の 3 つの軸で構造化できます。

① 生命・安全インフラの脆弱性 産科・小児科・救急	② 成長・教育機会の格差 塾・習い事・進路選択	③ 保護者支援の断片化 仕事・孤立・経済的負担
・産科が七尾・金沢のみ ・救急・夜間対応の不確実性 ・妊娠の意思決定に影響 → 出生数減少の直接要因	・塾・習い事の選択肢が少ない ・フリースクールがない ・高校進学で若者が流出 → U ターン率の低下を招く	・病児保育・一時預かり不足 ・屋内遊び場がない ・孤立した子育て・介護 W 負担 → 女性の流出・離職を加速

この 3 つの課題が相互に絡み合い、「能登では子育てできない」という認識を生み出しています。一つの課題を解決するだけでは不十分であり、同時並行で対処する包括的なアプローチが必要です。

提言 一 能登での子育てを守る 5 つの柱

以下に、参加者の声と議論をもとにした具体的な政策提言を示します。

提言 1 周産期・救急医療の整備 【最優先】

「安心して産める地域」なくして子育て支援なし。能登北部における産科・救急・小児科の機能強化を最優先課題と位置づける。

- 能登北部の産科クリニック誘致または巡回診療の実現（石川県・国への強力な働きかけ）
- 救急・夜間・休日対応の体制を可視化し、妊婦・乳幼児家庭向けの「アクセスガイド」を作成・配布
- 周辺病院（七尾・輪島・金沢）との連携手順・役割分担を整備し、緊急搬送の不安を軽減
- 産後ケアの費用補助拡充（産後ケアを「利用しやすい価格」に）

「お腹が大きいのに出血して、近くに産科がなくて…。こんな状況で第二子を考えられますか？」

提言 2 教育・学習環境の格差解消

子どもたちが「地元でも十分に学べる・育てる」と思える環境をつくる。

- 塾・習い事のオンライン受講への通信費・受講費補助制度を創設
- 移動型学習支援「トレーラーハウス型巡回教室」の試験導入（複数市町での共同運営）
- フリースクール・不登校支援施設の設置（町に一か所以上）
- 部活動の地域移行を促進し、少人数でも活動できるクラブチーム支援
- 学校での「失敗を許容する評価」の導入推進（何度でも再挑戦できる評価の仕組み・探究学習の評価など）
- 地域企業・医療機関と連携したキャリア探究プログラムで「地元に戻る理由」を育む

「100人中10人しか地元に残りたいと言わなかった。子どもたちに、ここで生きていける未来を見せてあげたい。」

提言3 子育て支援の拠点づくりと孤立の解消

「誰かに頼れる場所」を物理的・制度的につくる。

- 各地区に「子育て・世代間交流の拠点」（屋内遊び場・親子サロン・相談窓口を一体化した施設）を設置
- 病児保育・一時預かりの拡充（緊急対応も含め、短時間から気軽に利用可能な体制）
- 元気なシニア世代（活躍できるおじいちゃん・おばあちゃん）が子育てに参加できる「地域サポーター制度」
- 移住者と地元住民のママをつなぐ仕組みの整備（地域産後サロン、移住者向けガイドなど）
- 介護と育児が重なる「ダブルケア世帯」への特別支援（相談窓口・ヘルパー派遣など）
- 中高生が放課後に自習・交流できる「10代の居場所」の整備（Wi-Fi完備の自習室、居場所カフェなど）
- 部活動の地域移行に伴う放課後の受け皿づくり（地域クラブ・ボランティア指導者の確保と支援）

「引っ越してきて知り合いもいなくて、保育園の持ち物さえ誰に聞けばいいのか分からなかった。あの孤独感は今でも忘れられない。」

提言4 女性のキャリア継続支援

「子どもを産んでも働き続けられる能登」を実現する。

- 育休・産休後の職場復帰を支援する「能登版キャリアサポートプログラム」の構築
- テレワーク・副業も可能な「女性就労支援センター」の設置（キャリア相談・スキルアップ講座）
- 事業者向けの「育児支援企業認証制度」で、子育てしながら働きやすい職場づくりを促進
- 不登校・障がい児を持つ親への就労継続支援（ヘルパー制度・フレキシブル勤務制度）

提言5 震災復興を「子育て環境の再設計」のチャンスに

ピンチをチャンスに。復興まちづくりに「子育て世代の声」を組み込む。

- 復興計画の策定に子育て世代の代表を正式に参加させる仕組みを作る
- 「近未来的・試験的な取り組み」の実証フィールドとして能登を位置づけ（国・県への提案）
- Uターン・Jターンを促進する奨学金返還支援・住宅補助・インターンシップ制度のパッケージ化
- 子育て世帯向けの住宅再建・取得支援の充実（被災を理由に住まいが確保できないケースへの対応）

「震災で人口も減り、空き地も増えた。それをマイナスと捉えずに、これをチャンスにして近未来的な実験場にしてほしい。」

参加者の声（自由記述より抜粋）

アンケートの自由記述から、特に印象的な声をご紹介します。

「能登での子育てを諦めた友人・知人が何人もいます。未来の能登のために何かしたい。」

「シングルマザーで土日勤務。面倒見のいい友人がイベントに娘を連れて行ってきてとても助かっている。おじいちゃん・おばあちゃんが集まる場所で一緒に過ごせたらいいのに、と思う。」

「町に不登校支援がなく、子どもが回復してきても行ける場所がない。仕事も続けられなくなる。能登に住むことは、今後を考えると不安の方が大きい。」

「フリースクールがない。（一言だが、この切実さを受け止めてほしい）」

「嬉しかったのは、0歳を抱っこ紐で抱えながら買い物していたら、年配の方が「これ使っ
ていいよ」とカートを貸してくれたこと。地域のあたたかさが能登の一番の宝だと思う。」

「県の子育て支援はいつも小出し。特に能登での支援は積極的に行ってほしい。」

当日参加された議員・議会関係者より

当日は能登地区の市議・町議4名および能登選出の国会議員1名が参加され、次のような声をい
ただきました。

「皆さんの生々しいお声を聞いて、私も泣きながら子育てをしてきた一人として、しっかり
立場でできることに取り組みたい。（市議）」

「30年前に私が子育てをした環境と、今の子どもたちの環境は全く違う。現実を変えてい
くためにも、若い世代がどんどん選挙に行くことが大切。（町議）」

「周産期医療、本当に能登北部は病院もない。こんな状況で安心して子どもを産めない。災
害を乗り越えて、ここを立て直すチャンスだと捉えて整えていきたい。（町議）」

おわりに — 能登の子育てに、もう少しだけ力を貸してください

能登の子育て環境が厳しいのは、いくつかの要因が重なった結果です。しかし、それは「仕方が
ないこと」ではありません。

自然豊かな環境、地域のつながり、伝統文化と食の豊かさ——能登には子育ての本物の「宝」が
あります。今必要なのは、その宝を活かせる「安心の土台」です。

今回の女子会で、涙ながらに語った参加者がいました。「能登で子育てを諦めた友人を何人も見送った」という声がありました。それでも諦めずに能登に踏みとどまっている親たちがいます。

私たちの 5 つの提言

1. 周産期・救急医療の整備 【最優先】
2. 教育・学習環境の格差解消
3. 子育て支援の拠点づくりと孤立の解消
4. 女性のキャリア継続支援
5. 震災復興を「子育て環境の再設計」のチャンスに

これらの提言は、決して難しいことをお願いしているわけではありません。今すでに動き始めている人たちがいます。制度を変え、予算をつけ、仕組みを作ることが、これからの能登を子育てしやすい場所に変えていきます。

「子育てしやすい能登」をつくることは、能登の復興そのものです。この提言書を読んでもらった皆さんと一緒に、一歩ずつ前に進んでいけたら、こんなに心強いことはありません。

本提言書の共有をお願いします

この提言書を、能登の子育て環境に関心をお持ちのすべての方に広くご共有いただきたいと思います。

地方議員・首長の方々だけでなく、企業関係者、教育・医療関係者、移住検討中の方々、そして能登の未来を想うすべての人々に届けることで、より大きな変化につながると信じています。

この提言書が、能登で子どもを産み育てることを地域みんなで支え合う——そんな未来への小さな一歩になれることを、心から願っています。

のとルネ実行委員会

2026 年 3 月